Story

「やめて……もう許して……！」
　長年想い続けた義兄と遂に結ばれることができた少女に、卑劣な男の魔手が迫る。
「イヤ、私には兄さんが……好きな人がいるのっ」
　兄に見せるはずだったビキニが毟られ、豊かな乳房が剥き出される。
「中に出さないで、お願い、それだけは許してぇ！」
　ビーチに響く香乃の悲鳴は兄には届かない。
　若い女体は心を裏切り、憎むべき男にじわじわと蝕まれていく。そしていつしか甘い声が漏れてしまう。
「ごめんなさい兄さん、私、もう、もう……アアッ」
　白い肌に卑猥な水着の跡を焼き付けられた香乃に、愛しい兄の前で望まぬ絶頂を曝す恥辱が襲う……。

カバー絵彩色・カバーデザイン／Lim

「奪妹(だつまい)～寝取(ねと)られた義妹(ぎまい)」

青橋由高(あおはしゆたか)（著）・安藤智也(あんどうともや)（イラスト）

目次

プロローグ 4
第一章 6
第二章 20
第三章 63
第四章 102
エピローグ 136
オリジナル版あとがき 141
電子版あとがき 145

プロローグ

史郎(しろう)が初めて妹の香乃(かの)と結ばれたのは今年の春だった。香乃が十八歳となったその日の夜、二人は長年の想いを遂げた。

「んん……ああ、兄さん、兄さん……アアッ」

破瓜の痛みにその愛らしい顔を歪める義妹に申し訳ないという気持ちになりつつも、史郎は腰の動きを止めらなかった。コンドーム越しでもはっきりと伝わってくる香乃の膣襞の熱と締めつけに、二十年以上童貞を守り続けた史郎は一分かからずにフィニッシュを迎えてしまう。

「凄い……これが赤ちゃんの素なんだ……」

事後、香乃は羞じらいつつも興味深そうにたっぷりとザーメンの入ったゴムを見続けていた。

「いつかこれが私の中に来るんだね。そしていつか、私と兄さんのあいだに……」

純潔を奪われたばかりの香乃が愛おしげに下腹部を撫でつつ、潤んだ瞳で史郎を見つめる。黙ったまま兄の目を見つめてくるのは、キスして欲しいというサインだ。

「ん……っ」

だから史郎は、この美しくも甘えん坊な妹に唇を重ね合わせる。

それは史郎の人生にとって最も幸福な時間の始まりであり、最も深い悲しみへの助走がスタートした瞬間でもあった。

第一章

両親が再婚したことで義理の兄妹となった二人が、いつから互いを異性として意識し始めたのか、もう本人たちも覚えていない。

最初にこの秘めた想いを打ち明けたのは、妹の香乃からだった。

「兄さんが好きなの。ずっと前から。もしかしたら出会ったあの日から」

同じように一人の女性として義妹に好意を抱いていた史郎も、自身の想いを告げた。

「僕も、香乃のことが好きだ」

そして初めて二人は口づけを交わし、そのまま舌を絡め合い、まるでもつれるようにベッドに転がった。

そこから先のことは、史郎もよく覚えていない。

かろうじてぎりぎり残っていた理性で避妊具を着用したところまでは記憶にあるものの、その後は無我夢中だったのだ。

「香乃……いいか？」

「えっ……う、うん……でも、帰ってきたばかりだから、シャワー浴びてからで……あっ……ダメ、兄さん……んん……ん……！」

だから史郎は、まるで初体験の記憶を取り戻そうとするかのように、毎日のように香乃を求め続けた。
今も、学校から帰ってきたばかりの義妹を部屋に連れ込み、強引に唇を奪い、制服の上からその豊かな乳房を揉みしだいている。
「香乃……香乃……好きだ……香乃……っ」
「ああ、私も……私も兄さんが好きぃ……あっ、あっ、イヤ、そんなにされたら立ってられなくなるぅ……ああン」
妹の甘い汗の匂いを嗅ぎながら首筋に唇を押しつける。スカートの中に手を潜らせ、柔らかい太腿を撫でてからショーツ越しに香乃の縦溝を指先でまさぐる。
兄によって純潔を奪われた秘部は早くも汗とは別の液体でうっすらと潤み、下着越しでもわかるほど熱を帯びていた。
「こんなに濡らして、香乃はどんどんエッチになっていくな」
「し、知らないっ。私、エッチじゃないもん……アッ……アアン！」
ぷくりと盛り上がった陰核を指の腹で軽く押し潰した途端、香乃の膝ががくんと折れ、その場に崩れ落ちた。
「香乃、部屋に行くぞ」

頬を赤らめ、瞳を潤ませた香乃にそう告げると、
「うん」
この美しく成長した自慢の妹は小さく、しかしすぐに頷く。
「あ、でも待って兄さん」
「なんだ？」
「あの、その……部屋まで、抱っこして欲しいの」
香乃はそう言って、きゅっ、と史郎の首にしがみつく。
ふわりと漂ってくる甘い汗の匂いと胸に当たる柔らかい乳肉の感触、そしてなによりもこの義妹の可愛らしいおねだりに、史郎の理性は一気に弾け飛んだ。
「きゃん！」
リクエストどおりに香乃を抱き抱えた史郎は、まるで走るようにして自室へと向かう。もう一秒たりとも我慢できる自信などなかったのだ。
「あ、に、兄さん、乱暴すぎるよ、もうっ」
ベッドに横たえられた香乃はちょっとだけ史郎を睨むが、その整った顔には明らかに淫らな期待が浮かんでいた。乱れた制服を直そうともせず、服を脱ぎ捨てていく兄を見つめる。
「香乃……」
「ああ、兄さん……」

全裸になった史郎はそのいきり立ったイチモツを曝け出したまま、今度は妹の服を脱がしにかかった。
「香乃……綺麗だ」
妹の清純さを強調するような制服と下着を性急に剥ぎ取った史郎は、感動の面持ちで香乃の裸体を見下ろす。
「兄さん……恥ずかしいから、そんなに見ないで」
組み敷かれた香乃は、その静脈まで透き通るような白い肌を羞恥に赤らめる。
「なんで恥ずかしいんだよ。お前の身体は最高に綺麗じゃないか。このままずっと、一日中だって眺めていたいくらいだ」
日焼けとは無縁の、白磁を彷彿とさせる美しい肌、そしてそこにうっすらと浮かぶ汗の輝きに、史郎は何度も生唾を呑み込む。
「ダメ、そんなにじっと見られたら、恥ずかしくて死んじゃう……っ」
香乃は両手でその急速に育った乳房と股間の淡い翳りを隠そうとするが、史郎はそれを許さない。
「あっ……兄さんのエッチ……ああ……恥ずかしいのにぃ……ンン」
香乃の細い両手首をベッドに押しつけたまま、僅かに甘い唇を奪う。舌を伸ばし、妹の口内を味わう。

（香乃、いつもより積極的だな）
普段はどこか遠慮がちに舌を動かす香乃だが、今日は自分から兄のキスに応えてくれる。
互いの想いを確認し合うように舌が蠢き、唾液が絡み、淫らな音が部屋に響く。
「ん、ん、んぅ……んっ……んふ……！」
香乃がくぐもった声を上げたのは、史郎の手が胸乳に触れたからだ。
（香乃のやつ、またおっぱい育ったんじゃないのか？）
男の手のひらでも包みきれないほどたわわに実った妹の膨らみに、史郎の欲望が加速する。
「アァッ、イヤ、兄さん、そんなに強くしたらダメ……ああっ、あはぁ……！」
唾液で妖しく濡れた唇から切なげな声が漏れる。
両手で顔を隠し喘ぎ声を堪えようとしてるようだが、ツンとしこった乳首を史郎に吸われた瞬間、香乃は早くも軽いアクメを迎えてしまう。
（抱くたびにどんどん敏感になってるな、こいつ）
最初はあれほど痛がったというのに、回を重ねるごとにこの愛しい義妹は次第に女の反応を見せてくれる。
「ん、んっ……兄さん、そんなに先っぽばっかりいじめちゃイヤ……あン！」

淡いピンクの乳首は唾液まみれになりながらツンと勃起し、史郎の舌が触れるたびに小刻みに震える。
「あっ、やっ……兄さん、ダメ……あは……アアッ」
妹の甘い汗を舐め取るように白い肌に舌を這わせ、まだ芯に硬さの残る乳房を荒々しく揉む。
（あの香乃が……子供の頃はいつも僕のあとを追いかけてきたあのちっちゃな香乃が、今、僕の愛撫で喘いでる。僕の唇で、舌で、指で、色っぽい声を上げて悶えてる……！）
義理とはいえ、妹にこんな行為をしてる背徳感はもちろんある。両親に申し訳ないという気持ちも拭えない。
けれど、それ以上にこの愛くるしい義妹への想いが強いのだ。
「香乃、香乃……好きだ……好きだ……っ」
「あっ、あっ、私も、私も兄さんのことが好きぃ……ああ、もっと、もっと触って、私の身体、兄さん専用にして……ぇ！」
乳首を吸っていた史郎の頭を両腕で抱き抱えながら、香乃が感極まった声を出す。
妹の汗の匂いと乳房の柔らかさに息苦しさを覚えつつも史郎はますます分身をたぎらせ、先走りを尿道口から垂れ流す。

「ご、ごめん香乃、僕、もう我慢できないよ……っ」
（あ、来る……兄さんのが私の膣内に来る……！）
キスと胸への愛撫で潤んだ秘口に、熱くて硬いモノがあてがわれた。粘膜同士の接触に、処女を卒業したばかりの若い肢体がびくりと震える。
（ああ、太い……兄さんの太いよお……っ）
女になって一月しか経ってない香乃の膣穴にとって、義兄の亀頭はまだまだ恐怖の対象だ。挿入するまでは若干、痛みがある。
（おっぱいだけじゃなくて、もっとこっちも指でいじって欲しいな……）
その原因は、史郎の愛撫が乳房ばかりに偏り、あまり女陰をほぐしてくれないことにもあった。
今回も、ショーツ越しにクレヴァスを撫でられたり、クリトリスをこね回された程度で、肝心の媚唇や蜜穴はほとんどいじられていない。
「んっ……くっ……アア……兄さん……ううっ！」
大好きな兄とのキスやハグ、そして胸乳への愛撫によって香乃の秘所は潤ってこそいるものの、やはり男根を受け入れるにはほぐしが足りなかった。
（痛い……けど、でも嬉しい……兄さんと一つになってるよ……ぉ）
逞しいペニスが香乃の肉襞を押し分けるようにして

侵入してきた。
「ぐうぅ……キツい……！」
狭い肉洞の締めつけに歯を食いしばりながら、史郎の分身が香乃の膣を貫いてくる。
「兄さ……ウウッ……ダメ……そんな深くまで来たら……壊れちゃう……っ」
しかし一番太いエラの部分が通過すれば、あとはするりと最深部まで勃起が収まってしまう。
勢い余って亀頭がコツンと子宮口に触れてしまい、香乃はその衝撃に呻き声を漏らす。
「香乃……香乃……っ」
「兄さん……ああ、兄さん……！」
深々と繋がった兄妹はどちらからともなく唇を重ね、互いの舌と唾液を貪り始める。
「んっ、んっ……はむ、ん、くちゅ……くちゅ、ちゅ、ぴちゅ……」
混じり合った唾液が口内を何度も往復するあいだも二人は強く抱き合い、汗で濡れた肌を重ねる。
史郎の胸板に潰された香乃の柔乳が変形し、脇にはみ出す。
（擦れちゃう……硬くなった乳首、兄さんと擦れて、気持ちイイ……ああっ、私の身体、どんどんエッチになってるよお……兄さん専用の女の子にされちゃう…

……！）

この唇も、胸も、膣も、そしていつか二人の愛の結晶が宿るであろう子宮も、そのすべてを大好きな兄に捧げるのだと想像するだけで香乃の若い女体は妖しく疼き、白く濁った蜜を分泌してしまう。

（どうしよう、気持ちイイ……まだ兄さんのオチン×ン、キツくて苦しいのに、それも嫌いじゃないなんて……ああっ、凄いの、兄さんの、奥まで届いてる……ぅ）

己から淫らなフェロモンが溢れてくるのがはっきりわかる。

結合部から次々と溢れ出る愛液が増え続けてるのも、開通してまもない膣道が妖しく蠕動してるのも、明瞭に知覚できてしまう。

「香乃のマ×コ、凄くうねってるぞ」

「やあっ、言わないで……違うの、これは、だから、だって……ンン……！」

兄のあけすけなセリフに香乃は全身をかっと赤らめるが、その羞恥すらどこか心地よく感じてる自分がいることに驚愕する。

（どうして……ああ、どうして恥ずかしいのにお腹の奥がきゅんってしちゃうの？）

気付けば、挿入時の違和感も息苦しさも薄れ、下腹

部からは甘い痺れが徐々に上ってきていた。
妹の愛液をローション代わりに、史郎が腰を使って肉槍を突いてくる。
「んうっ、んっ、うふっ、ふうぅ……はあ、はっ、はあぁ……っ！」
逞しい勃起が膣を出入りするたびに、香乃の口から喘ぎ声が漏れてしまう。
史郎のピストンはリズムも強弱も単調なのだが、その一定のストロークがじわじわと香乃に快感を蓄積させるのだ。
「アア、アア、アアアァ……！」
好きな男と肌を重ね、互いを抱き締め、愛を確かめ合う。
この身も心も蕩かすような甘いセックスを知ってしまった今、他に欲しいものなどなにもなくなる。
「兄さん、ああ、兄さん……っ」
愛撫も、テクニックも必要ない。
ただこうして愛しい人の息遣いと体温さえ感じられれば、それで充分だった。
（あ、あ、アレが来る……気持ちよくなっちゃう……あっ、来る……来る……ッ）
最近オルガスムスを覚えたばかりの女体が急速に接近する大波を敏感に察知し、その瞬間に備えてより大

量の愛液を吐き出す。
「はああっ、あっ、あはっ……ああ、兄さん、ダメ、ダメ……私、イク……イッちゃうよお……！」
「香乃、僕もそろそろ……ううっ」
兄のその言葉を裏付けるように膣内の剛直が一回り膨張する。
牡の爆発に気づき、子宮がざわざわと疼き出す。
「兄さん、私、平気だから……今日は大丈夫な日だから……ぁ！」
女の本能に命じられるまま、美しい少女があられもないおねだりを叫ぶ。
（だから、だから出して、私の奥に、兄さん専用の子宮に、精液、たくさん注いで……!!）
両脚を義兄の腰に巻きつけようとしたのは、熱い子種を女体の最も深い場所で味わいたいという想いの表れだった。が、香乃が史郎の腰をロックするより一瞬早く、
「くあ……ッ！」
愛しいペニスは絶頂寸前の蜜壺から引き抜かれてしまう。
そして一瞬遅れて、愛液まみれとなった肉竿から次々とザーメンが噴き出し、香乃の腹部へと発射されていく。

「ああ……兄さんの熱い……はあぁ……あっ……ンン……！」
火傷するかと錯覚するほど熱い精液に肌を焼かれながら、香乃も兄を追って愉悦の頂に達する。
「ああ……イイ……気持ちイイの、兄さん……あっ……あは……ァ！」
お預けを食らった媚粘膜と子宮の寂しさを埋めるように、その絶頂の波はゆっくりと、けれど確実に香乃の全身へと広がっていった。

普段はしっかり者の優等生という評価を得ている義妹は、史郎と二人きりになると途端に甘えん坊になる。こうして兄妹以上の関係となった今はより顕著になったが、エッチ後はまさにそれがピークを迎えるのだ。
「兄さん、もっとぎゅってして」
まだ汗をかいたまま全裸で抱き合い、
「兄さん、もっとなでなでして」
さらさらの髪を優しく撫で、
「兄さん、もっとちゅっちゅして」
そしてついばむような甘いキスを数え切れないほど繰り返す。
もちろん、こんなことをしてれば若い肉棒はあっさ

り復活してしまうため、すぐに第二ラウンド、時には第三ラウンドまで延長戦が続くこともある。
　ちなみに現在はその第三戦を終え、二人ともへろへろになった状態だ。シーツは激しく乱れ、大量の体液を吸ってぐっちょりと重い。
「ねえ、兄さん」
「ん？」
「どうして……ううん、なんでもない」
　なにかを言いかけた香乃だがすぐに首を振り、そのままこてん、と史郎の胸に顔を預けてくる。
「なんだよ、途中でやめるなって。気になるだろ？」
「んー……秘密」
「おい香乃」
「ダーメ。鈍感な兄さんには秘密」
　えへへ、と悪戯っぽく笑う香乃だが、長年兄妹として一緒に暮らしてきた史郎には、それがなにかを誤魔化すときの表情だと知っている。
　けれど同時に、この義妹はその外見とは裏腹になかなか頑固な性格であることも熟知してるのだ。つまり、（あまりしつこく聞くのは逆効果か）
　香乃が自分から言い出すのを待つしかない。あるいは、今、香乃が言いかけた内容をこちらで推察するか、だ。

だが、結局この疑問に対する答えに史郎は独力で到達することはなかった。

もし。

もしこのとき、史郎が妹の求めるままその子宮に己の精液を注いでいたら、あるいは未来は変わっていたのかもしれない。

第二章

（もう、兄さんのバカ！　バカバカ！）

高校生活最後の夏休みは、香乃がずっと夢見ていたものとは明らかに異なる様相を呈しつつあった。

（せっかく一緒に泳げると思ったのに！　水着も新調したのに！）

夏になると毎年一週間ほど、親戚が経営する旅館の手伝いをしつつ近くの海で遊ぶ、というのがここ数年の香乃と史郎の恒例行事だったのだ。

特に今年は二人が恋人になって最初の夏なのだから、乙女である香乃はかなり前から楽しみにしていた。

が、史郎は出発直前になって大学の用事で行けなくなったと言い出したため、香乃はずっと不機嫌モードのまま、この日を迎えてしまう。

（それに最近の兄さん、大学が忙しいからって私のこと、全然かまってくれないし）

香乃の機嫌がよろしくないもう一つの理由が、史郎と二人きりの時間が減っていることだ。

ゼミの関係であれこれ忙しく、大学から帰ってくるのが連日遅い。たまに休みの日があっても昼過ぎまで寝ているし、当然、一緒に出掛けたり遊んだり、そし

てエッチする回数も激減してるのだ。
（なんだかこれって、夫が忙しくて放っておかれた奥さんみたい）
そんなふうに考えると「やだ、夫婦だなんて……きゃっ」などと一人赤面して少しは気も紛れるのだが、寂しいことには変わりない。
精神的な寂しさだけなら、まだよかったかもしれない。むしろ香乃を苦しめたのは、愛しい義兄に女にしてもらった肉体の疼きだった。
（兄さんだってホントは私といっぱいエッチしたいくせに、変に意固地になったり見栄張ったりするんだから！　バカバカ！）
初体験を済ませてからしばらくは、史郎は毎日のように香乃を求めてきた。
ところがここのところ、意識して香乃とそういった行為に及ばないよう自制してるフシが見られるのだ。
あまりがっついて妹に嫌われたくない、という兄の心配もわかるが、今の香乃にはまったくもって逆効果だった。
（兄さんが触ってくれないから、毎晩自分でいじってるんだよ、私……。可愛い妹にこんなエッチな想いさせて……兄さんのバカ）
昨晩も淫らな期待を抱いて兄の部屋を訪れたという

のに、押し倒してくれないばかりか、キスも軽いものだけで、舌すら絡めてくれなかったのだ。
（いいもん、私一人でも海で楽しむんだから！　羨ましがってももう遅いんだからね！　兄さんのバカっ）

胸の中で「兄さんのバカ」を数え切れないほど繰り返してるうちに、香乃の乗ったバスは伯父の経営する旅館に着いていた。
「お、来たな香乃」
「今年もお世話になります、伯父さん」
「遠いところから来たばかりで悪いが、今夜から手伝ってくれないか。さっき団体さんが到着して人手が足りないんだ」
「わかりました。私の部屋はいつものところでいいんですね？」
「ああ」
毎年のことなので、お互い慣れたものである。香乃は離れにある従業員用の部屋に荷物を置くとすぐに女将である伯母の元に向かう。
「伯母さん、お久しぶりです」
「あら香乃ちゃん、いらっしゃい。ごめんなさいね、いきなり駆り出したりして」

「いえ、その分、暇になったときはいっぱい自由時間もらいますから」
冗談めかして笑いながら、従業員用の和服に着替える。
子供の頃から史郎と一緒に何度も来てる旅館なので、下手なバイトよりもこの旅館については詳しい。
「お、いいところに来たわね嬢ちゃん。到着してすぐに悪いけど、お布団運ぶの手伝ってもらえるかな」
「はいっ」
挨拶もそこそこに、顔見知りの古株仲居と一緒に早速仕事に取りかかる。伯父の言っていたように団体客が到着したばかりらしい。
「今夜は忙しくなるから覚悟しておきな」
「ええ、望むところです」
身体を動かしていれば史郎への憤りを忘れていられるから、と香乃は心の内で付け加えた。

旅館にやって来て三日目、香乃はぶらぶらと一人でビーチを歩いていた。
兄に見せるために思い切って新調した白いビキニが寂しい。
今日は客も少なく手が足りてるということで休みを

もらったのだが、
「……つまんない」
正直なところ、面白くはなかった。むしろ、楽しそうにしているカップルや家族連れを見てると、どうして自分は一人なのかを考えてしまい、落ち込んでしまうほどだ。
「兄さん、今頃なにしてるんだろ」
比較的人気の少ない場所に出た香乃は砂浜に腰を下ろし、憎たらしいほどに青い空と海を睨みながらぽつりと呟く。
無論、毎晩電話やメッセージは来る。史郎には史郎の理由があるのもわかる。
これが互いの気持ちを打ち明け合う以前であれば、あるいはこんなにも腹が立つこともなかったろうし、今頃は一人で楽しく泳いでいたかもしれない。
しかし、香乃はもう知ってしまったのだ。愛しい人と肌を重ね、繋がり、一つになる至上の歓びを。
「……兄さんの、バカ」
この数日間だけで数百回は繰り返したセリフをもう一度口にしたそのとき、
「アンタ、そこの旅館で働いてる娘だろ？」
「ひゃう!?」
突然背後から声をかけられ、香乃は妙な声を上げて

しまった。
「おっと、驚かせたか、悪ぃ」
振り返ると、浅黒い肌をした男が立っていた。
歳は史郎よりも上だろう、二十代半ばから三十そこそこに見える。もっとも、この世代の異性と接した経験が少ないため、男の年齢がどれくらいなのかは正直よくわからない。
「……どなたでしょうか」
尋ねつつ、パーカーの前を合わせてビキニに包まれた豊かな胸を隠す。
「そんなに警戒しないでくれよ。初対面じゃないだろ？」
「え？……あ」
「思い出してくれたか？　そう、旅館に出入りしてる酒屋だよ」
髪型と服装が違うからすぐにはわからなかったが、確かに何度か旅館で見かけたことのある顔だった。
「しっかしショックだなぁ、すぐにわかってくれないなんて。俺はアンタのことずっと見てたってのにさ」
男はごく自然に隣に座るものだから、香乃はなにか言ったり立ち去るタイミングを逸してしまう。異性との接し方に慣れている、というのが最初の印象だった。
ここですぐに立ち去るのは失礼だと思うし、旅館と

取引のある人間なら無下にも扱えない。
「ずっと……？」
だから香乃は警戒しつつも、男との会話を続ける。
もしもここでさっさと帰っていれば、とこの数時間後に後悔することを香乃はまだ知らない。
「ああ、初めてアンタを見たのは一昨年かな？　去年も見たぜ。今年は兄貴は来てないのか？」
「兄さんを知ってるんですか？」
「何度か話したことはあるぜ。去年は一緒に釣りにも行ったしな」
その話は香乃も史郎から聞いていた。
共通の話題があることで、香乃から僅かに警戒心が薄れる。
「俺は勝野一平（かつのいっぺい）だ、改めてよろしくな香乃ちゃん」
「……よろしくです」
馴れ馴れしく「香乃ちゃん」と呼ばれるのはいい気持ちはしないが、爽やかな笑顔で差し出された手をはね除けられる度胸は香乃にはない。渋々握手をする。
（……兄さんよりずっと大きい手）
身長は史郎とさほど変わらないのに、一平は全体的にがっちりとした印象だ。白いシャツの上からでもわかるほど胸板は厚く、二の腕も太い。よく日焼けした肌のせいもあるのだろうが、逞しさを感じる身体だっ

た。
（やだ。なに兄さんと比べてるの私）
史郎の指の感触を思い出し、下腹部にほんのりと切ない疼きが生じる。
「兄さ……兄は、今年は大学が忙しいので私だけです」
「ああ、それで香乃ちゃん一人なんだ。でも一人で海なんてつまらないんじゃね？」
「……勝野さんも一人のようですが」
香乃なりの精一杯の皮肉だったが、
「堅苦しいなー。一平って呼んでくれよ」
この男にはまったく通じない。
「……それでは失礼します」
こういうタイプは苦手な香乃は立ち上がろうとするが、その手を一平が掴む。
「待ってよ。せっかく独り者同士、少しくらいお話してこーぜ？」
「離してください」
「ダーメ。いいって言ってくれるまで離さねーもん」
不自然なほどに白い歯を見せ、腹が立つほど爽やかに笑う。
（兄さんにもこのくらいの強引さがあればいいのに）
このままでは本当に手を離してくれそうになかった

し、周囲には多くの人がいることもあり、香乃はもう一度砂浜に腰を下ろした。
（それに、どうせ旅館に戻ってもやることなんてないし）
ふう、と溜息をついたのは、仕方なくですよ、という一平に向けた香乃なりのアピールだ。安い女と思われたくはない。
「へへ、よかった。俺、前々から香乃ちゃんと一度話してみたかったんだよ」
「……どうしてです？」
「どうしてって……そんなの、男だったら可愛い女の子とおしゃべりしたいって思うのは普通じゃん？」
（……軽い人）
女の子に向かって簡単に「可愛い」などと口走る男を、香乃は信用していない。無論、それが史郎であれば話は別だが。
けれど、十八歳の少女にとって、大人の男に己の容姿を褒められるのは悪い気がしないというのもまた真実だ。
「髪もさらさらだしさ、肌もすっげー白くて綺麗じゃん。こっちにいる女とはもうまるで別の人種って感じ」
「……よくもまあ、そんな歯の浮くようなセリフ、口

にできますね」
「だってマジでそう思ってるもんよ。あれ、もしかして香乃ちゃん、あんまり褒められたことない？」
「……」
「へー。都会の連中はバカばっかか。俺だったら速攻で口説くけどな」
さすがにここまで言われれば、自分が一平にナンパされてるのだと気付く。
「私、付き合ってる人がいますから」
こう言えば諦めるだろうという香乃の考えは、逆効果だった。

（へへ、なかなか悪くない感触だぜ）
隣に座る美少女の白い肌をちらちらと覗き見しながら、一平は心の中で舌なめずりをしていた。
（毎年狙ってはいたけど、今年はぐんと色っぽくなりやがって。恋人に開発でもされたか？）
一平が香乃を何年も前から狙ってたというのは嘘ではない。兄の史郎と仲良くなったのはただの偶然だが、香乃と近づけるかも、という計算も少なからずあった。
（史郎がいねーのはチャンスだな。この兄妹、いっつも一緒にいやがるしよ）

今年二十六歳になった一平は、実家の酒屋で働くようになってからは大人しくしていたが、元々は女遊びの激しい男だった。
学生の頃から同級生はもちろん、歳上や人妻にまで節操なく触手を伸ばしてきたのだ。
（史郎にゃ悪いからどうすっかちょっと迷ってたけど、恋人がいるって聞いたら、そりゃ手を出さないわけにゃいかねーよな。へへっ）
そして一平の一番の好物は、他人の女を横取りすることだった。
友人知人の恋人や妻を何度寝取ってきたか、一平自身、もうよく覚えていない。
もちろん、そのせいでトラブルになったケースも数知れないが、今のところ大火傷はしていない。本当に危険なゾーンを嗅ぎ分ける天性の勘があるのだ。
「そっか。香乃ちゃん、恋人いるのか。……どんなヤツだ？」
「え？……ひ、秘密ですっ」
付き合ってる男がいる、と答えれば諦めるとでも思ってたのか、一平が突っ込んだ質問をしてきたことに香乃が動揺する。そして、その動揺こそが一平の狙う隙となる。
「んじゃ、勝手に予想してみるぜ？　香乃ちゃんはブ

ラコンだからなー、史郎に似たタイプの男なんじゃね？　そこそこ背が高くて細くて、優等生タイプ」
「……秘密です」
「ああ、でも、あいつとは全然逆の男って可能性もあるか。それこそ、俺みたいな？」
「……秘密です」
「なかなか口が堅いな、香乃ちゃんは」
「普通、べらべらとそんなこと喋りません」
「えー？　俺、平気だぜ？」
「……」
　再び香乃が立ち上がろうとしたので、一平は慌てててその細い手首を掴む。
「ああ、も、もしかしてさ、香乃ちゃんのカレシって、史郎だったり？」
　冗談半分の、苦し紛れの一言だったが、
「……！」
　香乃のその顕著な反応が、すべてを物語っていた。
（げ。マジかよ）
　二人が義理の兄妹だと知らない一平は一瞬引くが、すぐにこれは好機だと思い直す。女の弱みほど使えるカードはないのだ。
「そっか、なるほどな。香乃ちゃんは史郎と兄妹の壁を越えちまったわけか。ふんふん」

「ち、ち、違います、勝手なこと言わないくださいっ！」
握った手首を通じて、香乃の震えが伝わってくる。どうやらビンゴらしい。
（こいつら、兄妹にしちゃべったりし過ぎてるとは思ってたけど、まさかねえ。やるじゃねえか史郎のヤツも）
一平の薄い唇が片側だけ持ち上がる。
（だが悪ぃな、史郎。お前の大事な妹、俺が喰っちまうよ）

（ど、ど、どうしよう、バレちゃったかも……私と兄さんの関係、勘づかれちゃったかも……っ）
自分の顔から血の気が引いていくのがはっきりとわかる。義兄との禁断の関係が他人に知られてしまったかもしれないという恐怖に、ビキニに包まれた若い肢体が小刻みに震える。
けれど、一平は香乃の予想とはまるで違う言葉をかけてきた。
「そっか。でも別にいいんじゃね？　愛の形なんて人それぞれだしよ」
「……え？」

「安心しな、俺はそこらへん、理解ある男だぜ？　無論、誰にも言わねーよ」
それまでの軽薄な表情が消え、真剣な顔で香乃を見つめてくる。
もちろんこれは一平の演技なのだが、人生経験の浅い香乃には見抜けない。
「俺でよければ相談に乗るぜ？」
だからつい、一平のそんな口車に乗ってしまい、史郎との関係を話してしまう。
「……なるほどな」
気付けば、太陽が水平線の向こうに落ちようかという時間になっていた。つまり、それだけ長い間、香乃は一平に話し続けていたということだ。
今まで誰にも話せなかった秘密を打ち明けられた解放感に、香乃は大きく息を吐く。ずっと胸につかえていた重しが消えたような軽さがあった。
「他の連中がなんて言うかは知らねーけど、俺は悪くないと思うぜ？　義理の関係なんだしよ」
「……ありがとうございます」
香乃は初めて、一平に向けて笑顔を見せた。
「お。ようやく笑ってくれたな。やっぱ香乃ちゃんは笑顔が似合うぜ」
「そ、そんな……」

照れる香乃は、まだ気付いていない。
陽が落ちたビーチからはどんどんと人が減り、今、自分たちの周囲にはもう誰もいなくなっていることに。
「……なあ、香乃ちゃん」
「はい？」
そして、隣に座る男の瞳に、危険な光が宿っていることにも。
「史郎とは、何度ヤったんだ？」
「……は？」
「だーかーらー、史郎には何度オマ×コされたんだって聞いてんの」
「な……っ！」
突然豹変した一平の顔に下卑な笑みが浮いているのに気付いたときには、もう遅かった。
（え。な、なんで私、空を見てるの？　さっきまでオレンジ色の海を見てたのに）
それは、自分が仰向けに押し倒されたせいだと気付くのに、数秒を要した。
わずか数秒、しかし女を犯すことに慣れた男にとっては充分過ぎるほどの猶予だ。
「あーあ。ショックだぜ。香乃ちゃんの処女マ×コは俺が奪っちまおうと思ってたのによー」
いつの間にか一平に組み敷かれていた。両手首を砂

浜に押しつけられ、がっちりとした体にのしかかられ、身動きがとれない。
「た、助けて……誰か助け……むぐぅ!?」
咄嗟に悲鳴を上げようとした口は、兄のものとは違う唇によって塞がれてしまう。
(う、嘘……やめて、やめてぇ！　キスはイヤ、兄さん以外の人とキスなんて絶対にイヤァ!!)
しかも、叫ぼうと口を開けた状態だったので侵入してくる舌を咄嗟に防げない。
「んむっ……ンン……ンーッ！」
気色の悪い舌が口内を這い回る。押し返そうとする舌も逆に絡め取られ、生温かい唾液が注がれる。
(やめて、やめて、やめてぇ！)
香乃は懸命に抵抗を見せるが、舌も、手も、身体も、この逞しい大人の男には敵わない。
押し返すどころか舌はより深く差し込まれ、股を押し開くように一平の腰が割り込んでくる。
筋肉質の身体はずしりと重く、華奢な少女に絶望を与える。
(誰か助けて……誰か、誰か……っ！)
しかし、もしも悲鳴を上げたとしても、その声は誰にも届くことはなかっただろう。
すでに香乃たちの周囲に人影はなく、たとえ二人を

見る者がいたとしても、カップルが抱き合ってると勘違いする可能性が高い。
（あっ、嘘……やめて、触らないで……イヤッ！）
少女の唇と舌だけでは飽き足らず、一平の手が香乃の乳房へと伸びる。兄のためにと購入した白いビキニの上から、若い乳房を揉まれてしまう。
「ンーッ！　ンッ、ンッ、ンゥーッ!!」
首や身体をよじって男の魔手から逃れようとするのだが、一平の腕力は想像以上に強く、香乃の抵抗は悲しいほどに通じない。
（やめて……もうやめてよお……ああ、胸はダメ、兄さん以外の人に触られたくない……っ！）
一平の骨張った大きな手のひらが左右の胸乳を交互に揉みしだく。
ビキニをずらすことはせず、しかも強弱のリズムをつけてくるのが憎たらしい。
手のひらの中央部分で膨らみの頂点を優しく擦ってくるのは、明らかに香乃の乳首を狙ってのものだ。
（そんなふうにしても感じるはずないのに！　あなたなんかに触られても気色悪いだけよっ！）
いっそこのまま舌を噛み切ってやろうかと本気で考えた刹那、一平がようやく香乃から唇を離した。
「ぷはっ！　へへ、どうだい、俺のキスは？」

先程までとは打って変わり、肉欲を露わにした男が勝ち誇った表情で香乃を見下ろしていた。己の優位を信じて疑わない、驕り高ぶった者の顔だ。
「……最低ッ」
悔し涙に滲んだ瞳で睨みつけてやったのは、恐怖よりも怒りが勝ったせいだ。
（こんな卑怯な、女を力尽くでどうこうしようなんて人に負けるもんですか！）
だが、ここでも香乃は選択肢を誤った。
大人しいと思っていた少女の意外な強情さは牡の欲望を刺激するだけなのだ。
「へー。いいね、その顔。普段の可愛い香乃ちゃんも好きだけど、今のそのきっつい目もたまんねーよ。ぞくぞくしちまう」
さっきまで香乃の口を犯していた長い舌がゆっくりと唇を舐める。
赤黒い舌がちろちろと動く様はどこか蛇を連想させ、香乃は初めて本気でこの男に畏怖を抱いた。

「どうした、助けを呼ばねーの？　今なら叫べるぜ？」
一平の言葉に、呆然としていた香乃は慌てて声を上

げ、人を呼ぶ。
「誰か、誰か助けてください！　誰か、誰かー!!」
しかし、押し倒され口唇と胸を嬲られてるあいだに周囲は暮れ、すっかり人もいなくなっていた。
「へへ、諦めなって。こんな田舎の浜辺なんて、暗くなったら誰も近づきゃしねーんだからさ」
どうやらそこまで計算していたらしい。あるいは、この付近で似たような不埒な行為をした経験があるのかもしれない。
不敵な笑みを浮かべた一平はいきなり香乃のビキニを捲り、史郎にしか見せたことのない白桃のような乳房を剥き出しにした。
「きゃああっ！」
「おっほ、ナイスなおっぱいじゃん。去年一昨年に比べて一気に育ったみてーだな、香乃ちゃんよ」
耳まで真っ赤にして香乃は曝け出された胸を隠そうとするのだが、一平は顔色一つ変えずに少女の腕を剥がしてしまう。腕力のあまりの差に、香乃の絶望がさらに深まる。
「初めてじゃねーんだろ？　だったらそんなに抵抗すんなって。ひと夏のアバンチュールだと思って愉しもうぜ？」
「だ、誰があなたみたいな人と……きゃっ！」

香乃が悲鳴を漏らしたのは、急に目の前が眩しくなったせいだ。それがスマホカメラのフラッシュだと知った途端、今度は別の意味で目の前が真っ暗になった。
「へへへ、香乃ちゃんのデカパイ、撮っちまったぜー？」
「な……な……っ」
怒りと悲しみに、言葉がうまく紡げない。
「おおっと、安心しな。これはあくまでも保険だ。俺は香乃ちゃんが考えてるほど悪党じゃねーからよ。アンタが大人しくしてくれれば、とっととデータ消してやるって」
「こ、こんなことされて信じられるはずが……！」
「まぁ、そりゃそーだけどよ、信じる信じないはともかく、香乃ちゃんに選択肢なんかねーの。そこんとこ理解して欲しいわけよ、俺としてはさ」
一平はまたしても長い舌で己の唇を湿らせる。どうやらこの男のクセらしいが、見てるだけで生理的な嫌悪を催す仕草だった。
「ど、どうしてこんなことをするんですかっ。私がいったいなにを」
「だーかーらー、ずっと狙ってたんだって。言ったろ？　香乃ちゃんみたいに可愛くて胸のでっかい女の子見たら、誰だって犯したくなるっての」

そのあからさますぎる、そして率直すぎる返答に、香乃は一瞬思考が止まる。
（な……なんなのこの人）
だが、その隙を一平は逃さない。
「んじゃ、乳首とマ×コ、いただきまーす。はむっ」
「ひゃあぁっ!?」
剥かれた乳房の先端突起を口に含まれると同時に、ビキニボトムの中に手を突っ込まれ、姫割れを指でまさぐられてしまう。
史郎とは全然違う感触におぞましさが駆け抜けるが、悲しいことに今の香乃に一平を振りほどく術はない。
「ひっ、ひっ……イヤ……イヤアアァッ!!」
それでも懸命に暴漢を引き剥がそうと抗うのだが、
「ひぎッ!?」
反撃の気力を奪い取ろうとするかのように一平は香乃の乳首を噛み、そして膣穴を指でまさぐってくるのだ。
「あんまり暴れるなって。ちゃんとほぐして濡らさねーと痛いだろ？　俺だってそんな乾いたマ×コにぶち込みたくねーっての。大人しく俺の愛撫に身を委ねてろ」
「だ、誰がそんな……はひィ！」
言い返そうとした香乃の肢体がびくんと跳ね上がっ

たのは、男の指が敏感な肉豆をこね回したためだ。
鋭い痛みが走ったあとに、じんじんとした痺れが広がるのが悔しい。
「ん、やっぱりここがイイんだな。ま、クリトリスいじられるのが嫌いな女もそうそういねーけど」
「や、やめて、触らないでっ！　汚らわしい！」
「へへ、いいねいいね。俺、可愛い女に罵られるの、大好きなんだ」
「ひうッ！」
一平は陰核を指の腹で転がしつつ、再び乳首を咥え、さらには反対側の乳房をその骨張った手のひらで揉み始めた。
「でも、そんなふうに抵抗してた女が最後は泣きながら俺にしがみついて、ヒイヒイ喘ぐ姿を見るのが一番好きだけどな……くくっ」
「アアッ……イヤ、イヤ……助けて……兄さん……アアアッ！」
甲高い声を漏らしてしまったのは、乳頭を舌先でほじられたままクリトリスを保護していた包皮を剥かれたせいだ。
過敏な女の弱点を守っていたフードがなくなり、根元まで曝け出された肉芽に直接男の手が触れる。
「おほっ、いいね、もうコリコリじゃん。こりゃあ、

史郎にヤられたせいじゃねーな。香乃ちゃん、オナニーしまくってただろ？」
「なっ……わ、私はそんにゃあぁッ!!」
言葉が途中で喘ぎに変わったのは、知らぬ間に膨張していたクリトリスを摘まれると同時に乳首をつねられたためだ。
「いいじゃんいいじゃん、香乃ちゃん、いい反応だぜ？」
鮮烈な痛みだけならまだしも、否定しようがない快感が若い女体を襲い、香乃は兄以外に見せたことがない反応を晒してしまう。
「さっきの話だと、穴開けられてまだちょっとだろ？
それにしちゃずいぶんと感度いいもんな、こりゃ、史郎に抱かれるのを妄想して散々オナってただろ、ん？」
「……」
香乃はきゅっと唇を結んで無言を貫くが、耳まで赤くなった顔は、肯定してしまったようなものだ。
（だって……だって……っ）
「あーあー、別に責めちゃねーよ。女だってオナニーくらいするっての。むしろ俺は好きだね、エロい女。普段は清楚だけどホントは淫乱っての、男にとっちゃ最高の女だぜ？」

一平はそんなことを喋るあいだも、香乃への愛撫をやめようとはしない。
乳房を揉む手には次第に力が籠もり、柔らかく弾力に満ちた乳房はたぷたぷとその形を変えている。
その先端は望まぬ反応によってピンとしこり、少女に悲しい疼きを送ってくる。
（あ、あ、そこはイヤ……触らないで……もう私をいじめないで……ぇ）
しかし最も変化が大きいのは、牝芯をいじられ続けた女陰だった。
フードを剥かれたクリトリスは浅ましいくらいに膨張し、普段はぴったりと閉じ合わさっている肉貝は内側から捲れ始めている。
「香乃ちゃん、結構濡れやすい体質みてーじゃん。ほら、俺の指、もうこんな」
「……ッ」
淫汁で濡れた指を鼻先に突きつけられた香乃は、汚辱と悔しさに涙を滲ませながら顔を背けた。そんなことをされずとも、己の秘所が恥液で潤んでしまってるのはとっくに自覚している。
（どうして……こんな男にいいようにされてるのに……どうして私……っ）
感覚を閉ざそうと意識すればするほど一平のタッチ

に肢体が反応してしまう。そのもどかしさに、香乃の瞳からぽろぽろと涙がこぼれ落ちていく。

力では敵わない。それならばせめて一切この男の愛撫に反応などしてやるものかと目を瞑った香乃だったが、その作戦は見事に裏目に出てしまう。

「あっ……ウウッ……ひっ……イヤ……ひっ……ひぃん！」

視界を遮断したことで逆に神経が一平の手や指、舌に集中してしまうと気付いたときにはもう、香乃の若く敏感な女体は引き返せないほどに昂ぶらされていた。

唾液で濡れ光る乳首はびっくりするほど勃起し、乳輪すらもぷくりと盛り上がっている。

知らぬ間に荒くなった呼吸に合わせて胸が上下すると、まるで男を誘うように巨乳が揺れるのがたまらなく恥ずかしい。

（嘘……嘘よこんなの……相手は兄さんじゃないのに……）

いつの間にかビキニボトムは横にずらされ、史郎しか見たことのない秘所が露わになっていた。淡い秘毛は汗と愛液で恥丘に張り付き、その下にあるクリトリスが丸見えだ。

（ヤダ……違う、こんなの私のじゃない……こんなエッチな身体、私、知らない……！）
薄い陰唇はすっかりほぐされ、その内側に守られていたサーモンピンクの粘膜を卑劣な男の視線に曝け出していた。火照った粘膜に潮風が当たるたびにびくびくと腰が震えてしまうのがたまらなく恥ずかしい。
「んー、いいねいいね、可愛いのに巨乳で敏感、しかも気が強いくせに快楽に弱いって……アンタ、最高だぜ」
じっとりと汗ばんだ首筋や乳房、脇腹をあの長い舌で舐め回していた一平が笑う。
「か、勝手なことを……ひうン！」
太腿の内側をさわさわと撫でられるだけでも背筋がぞくぞくしてしまう。
「へへ、乳首もクリちゃんもこんなにおっ勃ててるクセにまだ強がるところも俺好みだ。マンビラはまだ薄いけど、濡れ具合はすっかり大人だな、香乃ちゃん」
「やめ、て……やめて……触らないでぇ……ううっ……はああぁん……！」
乙女の柔肌を楽しむようなねちっこいタッチの合間に、乳首や陰核、そして媚唇といった性感帯への的確な愛撫が香乃を苦しめる。
（この人、女の子の扱いに慣れてる……ああ、イヤな

のに、吐き気がするほどおぞましいのにぃ……助けて兄さん、このままじゃ私、犯されちゃう……兄さん以外に触られたくないのに……ィ）

一平が言うように、香乃の秘部はすっかり淫らな汁で濡れていた。

柔らかくほぐされてしまった小陰唇が一平の指で左右に拡げられ、女が最も隠さなければならない粘膜が外気と、憎むべき強姦魔の視線に晒される。

「おー、綺麗なピンクじゃん。海の匂いもいいけど、こっちの甘酸っぱい香りのほうが俺は好きだな」

「イヤ、イヤ、嗅がないで……そんなところの匂い、嗅いじゃダメええぇっ!!」

股間に顔を近づけ、わざとらしく鼻を鳴らして女陰の匂いを嗅ぐのは、明らかに香乃の羞恥を煽るためだ。

だが、この卑劣な男はさらにそこからあの細長い舌を伸ばし、香乃をより深い絶望へと叩き落とす。

「ヒィッ!?　イヤ……嘘、なんで……や、やめて、やめて……舐めるのイヤアアッ!!」

史郎にすら数度しか許してないクンニリングスに、香乃は啼いた。

（嘘、嘘、嘘……舐められてる、私、こんな人に舐められてる……アアッ、もう許して、これ以上私を苦しめないでっ）

一平の舌は香乃の媚唇を隈無く這いずり回った。
充血したクリトリス、小さな尿道口、そして恐ろしげに、けれどどこか期待したようにひくつく蜜穴が執拗なまでに舐められてしまう。
「ひっ、ひっ……イヤァ……イヤなのぉ……ううっ……こんな……恥ずかしいよお……うう、ひぐっ……ひっく」
「おほっ、気持ちよすぎて歓喜の涙か？」
口の周りを愛液と涎で汚した一平が勝ち誇ったように笑うのが心底憎らしい。
「ち、違う……誰がこんなのでぇ……ひぃン！」
「素直に認めたほうがいいぜ？　ほれほれ、ここだろ、この可愛いマ×コ穴にとっととチ×ポぶち込んでもらいたいんだろ？」
「アアッ、アアッ、アアアアッ！」
長い舌が不気味なほどにうねりながら、愛液を吐き出し続ける膣口をほじる。
（そ、そこダメ、ダメなの、そこはホントにイヤ、挿れないで、舌を私の中に挿れるのイヤッ、もう、もうイヤなのぉ！）
史郎が与えてくれたのとは別種の愉悦がじわじわと少女を侵蝕していく。
だが、それでもまだこの男に対する嫌悪感のほうが

ずっと大きかったから、香乃はどうにか堪えられた。心を保っていられた。
一平の舌が香乃のもう一つの狭穴、窄まりを捉えるそのときまでは。

（耐えなきゃ……どんなことがあっても耐えなきゃ……兄さん、私に力を……こんな人に屈しない心をちょうだい……！）
絶望的な状況下にあってもなお、香乃の心は折れてはいなかった。
次々と波のように押し寄せる甘い快感を愛しい義兄への想いで堪えていた健気な少女は、しかし、男の舌が後門に触れた瞬間、決壊への一歩を踏み出してしまう。
「はひゃうぅ!?　ひっ、あっ……んひぃいぃ!?」
「ん？　なんだアンタ、こっちが弱いのか？」
一平はにやりと笑うと、今度は重点的に香乃のアヌスを責め立ててきた。
「ひっ、ひっ、ひぃっ、いひいいぃっ！」
陽も落ちてすっかり暗くなった砂浜に、憐れな少女の辛そうな、けれどどこか甘いものを帯びた嬌声が響く。

（なにこれ、なんなのこれっ!?　どうしてこの人そんなところを舐めてるの!?　そこ、違うよ、お尻だよ!?　アア、やめて、もうやめて……そこイヤ……イヤ……ッ！）

腰を揺すって凌辱魔から逃れようとあがくが、長い舌は執拗なまでに香乃の肛門を舐めまくる。

本人の意志とは関係なくアヌスがほぐれ始め、先端を尖らせた舌粘膜がぐぬりと少女の排泄口への侵入を開始する。

「ふうううぅっ……うっ……んうううぅーっ！　うああっ、イヤ、イヤ、イヤ……！」

首を左右に振って拒絶の言葉を繰り返すものの、その声は弱々しい。

（嘘、入ってる……お尻に舌が……ああ、気持ち悪いのに……気持ち悪いはずなのになんで……どうして私、こんなにぞくぞくしてるの……っ？）

自分でも触ったことなどない器官を他人の舌で嬲られてるというのに、凄まじい勢いで嫌悪感が悦楽に塗り潰されていく。

羞恥と困惑が、まるでオセロのように未知の快感へと変換されていくのは、泣きたくなるほどの恐怖だった。いや、実際に香乃の目からはぽろぽろと涙がこぼれ落ちていた。

「うっ、ううっ……ひっ……イヤ……も、もうイヤ……そこダメぇ……ああ、もう許して……お願い、そこは……お尻はもうイヤ……ァ！」
プライドも捨てて香乃は懇願するが、一平のアヌス責めは終わるどころかますます激しさを増す。
しかも乳房やクリトリス、膣穴への愛撫も同時にしてくるものだから、香乃はもはや泣いて、喘いで、身悶えるほかはなかった。
「ああっ、うっ、アア……ああン！」
乳首を捻られ、
「んひィ！　ひっ、ひっ……ひあぁぁッ！」
クリトリスを摘まれ、
「はああっ、ああっ、あう、あっはァ……！」
膣道を指で掻き回されるたびに、砂浜に甘く媚びるような嬌声が響いてしまう。
しかし香乃を最も怖れさせてるのは、深々とアヌスにめり込んだ舌の蠢きだった。
（す、凄い……凄い……どうして、どうしてこんなに動くのっ？　信じられない……舌なのに、まるで指みたいにいっぱい動いてぇ……ああん、これイヤ、イヤなのに……ああっ、兄さん、許して……香乃、変なの、お尻なのに……なのに……アア！）
この舌技でいったい何人の女を堕としてきたのか、

一平のテクニックは絶妙だった。
今まで触れられたことすらなかったアヌスは、早くもこの男の前に陥落寸前となる。
「ほらほら、我慢しなくていいんだぜ香乃ちゃん。うりうり。イッちまいな。俺の舌で初めてのアナルアクメ決めちまえって。おらっ」
「ヒイイィィッ!!」
肛門の中で舌があり得ないほど折れ曲がり、先端が腸襞をまさぐった直後、香乃は生まれて初めてのアナル絶頂を迎えてしまった。
「はひっ、ひっ、ヒッ……はあああアアッ!!」
びくん、と腰が跳ね上がり、同時に膣口から透明な飛沫が噴出する。
（イッた……イッちゃった……私、お尻でイカされちゃった……ぁ）
腰から下が消失したかのような鮮烈なオルガスムスに、香乃は何度も身体を震わせた。

「はあ、はあ、はあ……あ？」
今まで経験したことのない種類の快感に半ば放心状態だった香乃を現実に引き戻したのは、秘口に押し当てられた熱くて硬いモノだった。

「へっへ、んじゃ、いっただきまーす」
いつの間にか下半身を露出した一平のイチモツが香乃の膣穴に潜り込もうとしていた。禍々しく膨張した赤黒い亀頭が、香乃を貫こうと狙いを定めている。
「ヒッ……イ、イヤ、挿れないで……アアッ」
腰を揺すって狙いをずらそうとする香乃だったが、望まぬアナルアクメを迎えたばかりの女体は僅かにしか動いてくれない。
「よっ……と！　おらっ！」
「ひっ……ひぐ……ッ！」
ずん、という衝撃が香乃を襲った。
圧倒的な質量の異物が己の胎内に侵入したのを悟った瞬間、絶望と哀しみに心が塗り潰される。
「おほっ……すっげぇ締まる……マジかよ、これ……！」
美少女の膣道をペニスで埋め尽くした暴漢の声も遠くにしか聞こえない。
（お、犯された……兄さん以外のオチン×ンで汚された……）
兄に対する申し訳ないという気持ちに、新たに涙が溢れる。
しかし、卑劣な凌辱はこれからが本番だった。
「もう……許して……抜いてください……これ以上は

もう……もう……っ」
「あーん？　なに言ってんだよ香乃ちゃん。俺、挿れただけだぜ？　しかもまだ全部入ってねーし。大丈夫、俺、こう見えても紳士だからさ、独りよがりのセックスなんてしねぇよ」
一平はその大きな手のひらで香乃の乳房を強く、あるいは優しく揉みしだきながら、ピストンを開始した。
まずは己の分身を膣襞に馴染ませるように小刻みに動かす。
「んっ……んっ……んあ……ンン……ッ」
「イイねイイね、香乃ちゃんのマ×コ、チ×ポに吸いつく感じでたまんねーよ」
女体が意志に反してほぐれ始めたのを確認すると、今度はより強く突き込み、じわじわと膣奥への侵攻を始める。
「んっ、くっ、うう……ああ、イヤ……それ以上入ってこないで……ああ……っ」
兄のペニスも決して小さくはない。が、一平のそれは明らかに平均を大きく上回るサイズだった。
（ふ、太い……それに長い……こんなの無理よ、壊れちゃう……私のアソコ、壊されちゃう……っ）
しかし、香乃を困惑させたのはその長さでも太さでもなく、亀頭の形状だった。

「んーと、ここらへんかな？　それともこっちか？」
「あっ、んん……ダメ……動か、ないで……くうっ……んあぁ！」
いびつなほどに張り出したエラがごりごりと媚壁を擦るのがたまらなく辛い。否、たまらなく心地よいのが辛いのだ。
（なに、これ……アソコの中を硬いもので擦られてる……ぐりぐりされてる……ッ）
膣内を指で掻き回された経験はある。けれど、そのときとは比較にならないほど深く強烈な刺激が香乃を震わせた。
「ううっ、うっ……うああっ……はひゃああっ!?」
亀頭のエラが子宮口近くのあるポイントを押圧した刹那、香乃は甲高い声を上げていた。
「おっと、香乃ちゃんの弱点めっけ。ここをぐりってされるとたまんねーだろ？」
「ひううンン！　アッ、アッ……そ、そこダメ……そこはダメええぇっ!!」
一平が腰をくいくいと動かし、その一点を小突いてくる。
（ど、どうしたの私……なんでいきなりあんな恥ずかしい声を……あっ、あっ、またそこぐりぐりするぅ！　ああッ、やめ……あはああっ！）

自分でも知らなかった性感帯をあっさりと特定されてしまった少女に、もはや勝機などどこにも存在しなかった。
「んじゃ、一気にイクぜー。よっと！」
両脚が力任せに持ち上げられ、M字開脚を強要されてしまう。
「ああっ……イヤ、イヤ、こんな格好イヤァァ!!」
まるで結合部を見せつけるような卑猥かつ屈辱的なポーズに、香乃が泣く。
「ほら、俺のチ×ポがずっぽしはまってんの見えるだろ？　香乃ちゃんのマ×コ、最高だぜ、マジで」
香乃の膝を両手で固定したまま、勃起を垂直に打ち込んでくる。
史郎よりも一回りは太い剛直が愛液まみれになりながら容赦なく己の膣内を攪拌する光景に、香乃は泣き、呻き、嗚咽を漏らす。
（兄さん、兄さん、兄さん……っ）
愛しい人の名を胸の中で呼び続けながら、せめて肉体の反応だけでも制御しようと抗うものの、
「ココだろ、ココ！　おら、おらおら、おおうッ！」
「ひいいぃっ！　ひうっ、ひっ、やら、もっ、もうやらあぁっ！　そこはイヤらの、そこばっかりぐりぐりされると、されるとぉ……アアーッ！」

香乃の心ごと凌辱しようとするかのように一平は見つけたばかりのスポットを執拗に擦り、削り、押圧してくるのだ。
（イヤ、感じたくない、こんな男に負けたくないの！
でも、でもダメ……弱いところばっかりいじめられると、身体が勝手に……イヤなのに勝手に……ぃ！）
史郎では届かなかった深い場所にまで到達する衝撃は嫌悪感も恨みもおぞましさも押し流し、少女に牝の悦びを注入してくる。
一平がただ力任せに突いてくるような男であれば、まだ香乃も堪えられただろう。
しかしこの男は憎たらしいくらいに女の扱いに長けていたのが香乃にとっての不幸だった。
「あうっ、あっ、はうンン！　イヤ……イヤ……イヤ……ぁ」
「へへ、なにがイヤだよ。マン汁が泡立ってきてんじゃねーか」
一平に揶揄されたように、確かに香乃の秘裂は白く濁った本気汁によって淫らに濡れていた。
義兄のモノではないペニスに己の体液がべっとりとまとわりついてるのを見せられ、大声で泣き叫びたくなる。
「やめて……もうやめて……アアッ、アッ、アアア

ァ！」
自分でも、抗う声が弱々しくなってるのがわかる。己の肉体が浅ましい反応を示してしまってるのも認めざるを得ない。
けれど、それでも、香乃には負けられない理由があるのだ。
（兄さん……兄さん……ああ、大好きよ兄さん……！）
乳首を吸われ、乳房を蕩けるまで揉まれ、限界まで膨張したクリトリスをこね回され、目覚めさせられたアヌスを指でほじられ、熱を帯びた蜜壺を極太ペニスで攪拌されてもなお、香乃は懸命な抵抗を続ける。
「ま、負けなひ、んだかりゃあ……わた、ひっ……ひいン！　あなた、にゃんかにぃ……ンン……アアッ、絶対、負け、にゃ……はあアッ！」
だが、すでに女の悦びを知ってしまった若い肉体にとって、この男はあまりに相手が悪すぎた。
どこをどう責めれば女体が反応するのか、屈服するのか、すべてわかった上でこの憐れな牝をいたぶってくるのだ。
（ま、またお尻、お尻に指ぃ！　ダメ、もう挿れないで、香乃のお尻をほじるのやめてえぇ！）
男根で膣粘膜を擦り、亀頭で子宮口を押圧しながら

アヌスに指をねじ込み、目覚めたばかりの性感帯を同時に刺激してくる。
「どうだ、ケツ穴とマ×コのダブル挿入は」
「し、知らにゃい、こんにゃっ……こんにゃあ……ア……ヒイィーッ！」
膣道と肛洞を隔てる薄い壁を擦られ、香乃は浅い絶頂を迎えてしまう。
乳首も肉芽も限界まで膨らみ、切ないほど疼く。
乳房は芯まで蕩かされ、ピストンのたびに妖しく揺れてしまう。
「くっ……さすがによく締まりやがる。香乃ちゃんのマ×コ、名器だぜ！」
その言葉が嘘ではない証拠に、一平の表情にも余裕がなくなっていた。つまり、それだけ香乃の秘肉が意志とは無関係に勃起を締めつけている証拠でもある。
「ううっ、抜いて……もう、抜いてよお……はああっ、やあぁ……も、もうりゃめぇ……わたひ、壊れひゃうぅ……ひぐ……えぐ……っ」
「いいぜ、泣き顔もたまんなくそそるぜぇ……おらっ、ラストスパートだ！」
「ヒイィッ！」
遂に、一平がギアをトップに入れた。
それまでの制御されたピストンが一変、肉欲を露わ

にした野獣のような腰使いで香乃を貫いてくる。
「ああっ、あああっ！　ひっ、ひぎっ……うああっ、やめ……イヤよ、イヤ、もうイヤァァッ！　ヒッ、ヒッ、ヒイッ!!」
血管を浮かばせた屹立が容赦なく姫割れを犯し、子宮を押し潰さんばかりに叩く。
痛いほどに巨乳を揉み潰され、先端をつねられる。
「んむっ、んっ、んぐっ……ンンン……！」
無理矢理開かされた口に舌をねじ込まれ、汚らわしい唾液を強引に嚥下させられる。
（ひどい……ひどい……もう戻れない……兄さん、ごめんなさい……私、汚されちゃう……ケダモノに犯されちゃう……！）
膣内でペニスが膨れたのがわかった。それがなにを意味するのかも。
「ひひっ、出すぜ、このままたっぷり種付けしてやるぜ香乃ちゃん！」
「ダメ、それだけは許して、お願いだから中は、中だけは……！」
「イヤだね、このまま全部マ×コに中出ししてやるぜ、香乃ちゃんの子宮を俺のザーメンでたぷたぷにしてやる……ッ」
そのおぞましいセリフを裏付けるように、一平は香

乃の脚をより高々と掲げ、それまで以上に激しく腰を振ってきた。
あのいびつなエラが香乃の弱いポイントをごりごりと擦り、先走り汁で濡れた亀頭が子宮口を荒々しくノックする。
「ヒッ、ヒッ、そ、そこらめぇ！　やら、やら、奥は、奥は許ひてえぇっ!!」
女の最も神聖な器官が凶悪な振動に震え、脅える。
だが同時に、逞しい男の子種を求める牝の本能が香乃の女体を支配していく。
（き、気持ちイイ……こんな男に犯されてるのに、あそこが熱い……気持ちよくなってる……ああっ、兄さん助けて、このままじゃ私、堕ちちゃう……兄さんに好きって言ってもらった女の子じゃなくなっちゃうよお！）
もはや自分がレイプされて感じてるのは否定しきれない。
「あはっ、あっ、ああん！　イヤ、イヤなの、ホントはイヤなのにィ！」
両手がぎゅっと握られているのは、オルガスムスの到来が近いためだ。
左右のつま先も反り返り、漏れ出る声も媚びるように甘くなっている。

「ハアッ、アッ、ハアン！　も、もうやら、やらぁ……子宮、らめ、奥の壁、ごりごりしゅるのもらめえぇ……あーっ、あーっ、ああーっ！」
こぼれ落ちる涙には恥辱と愉悦が入り混じる。
「イクぞ、このまま……このまま注いでやる……ッ」
「ひっ、ひっ、ひっ……ひいいいぃっ!!」
子宮が勝手に下がったかと思った瞬間、香乃の膣内にマグマが噴出された。
「ぐおオッ！」

「ぐうぅっ……ウウッ……ウッ……アアーッ！」
それは、香乃の女体が初めて知る精液の味だった。
（イヤ……出されてる……兄さん以外の精子が……あ
あっ、やめて……出さないでぇ
……私を汚さないで……そこは……そこは兄さん以外
入っちゃいけないのに……！）
熱い白濁液が次々と子宮に飛びかかる。
嫌悪と絶望に、心が砕けそうになる。
しかし、今の香乃を最も支配してる感覚は、
（こんなのダメ……ダメなのに……ああ、イク……中
出しされて……犯されてイッちゃう……兄さん、ごめ
んなさい……香乃、イク……イク……ぅ！）
自分ではどうにも制御しきれない、牝だけが知る圧
倒的な愉悦の大波であった。